The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	伊藤伊吉の経歴と著書 : 日本近代朝鮮語教育史の視点から
Author(s)	植田, 晃次
Citation	言語文化研究. 2013, 39, p. 11-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24704
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

伊藤伊吉の経歴と著書－日本近代朝鮮語教育史の視点から－

植　田　晃　次

이토 이키치（伊藤伊吉）의 경력과 저서
－일본 근대 한국어 교육사의 시점에서－

우에다 고오지

논문초록: 이토 이키치（伊藤伊吉）는 1905년에 출판된 한국어 교재“독학 한어대성 전（獨學韓語大成 全)”의 저자로 알려진 인물이다. 그는 자신의 고향인 시즈오카（靜岡）에서 중학교를 마치고 홋카이도（北海道）에서 몇 년을 교원으로 지낸 후, 주로 상업에 종사하면서 러시아어, 한국어, 일본어 교재를 연달아 집필・출판한 인물이다.

본 논문은 이토의 수기한 생애와 그의 저작에 대하여 일본 근대 한국어 교육사의 시점에서 고찰한 연구이다.

キーワード: 伊藤伊吉，韓語大成，朝鮮語教育史

1．はじめに

伊藤伊吉は静岡に生まれ，北海道・シベリア・朝鮮を股にかけ教員から商業に転じて活動する傍ら，ロシア語･朝鮮語を身につけ，これらの言語や日本語の独習書を執筆した人物である。伊藤については，『独学韓語大成 全』の著者として知られているが，それは彼がおくった波乱万丈の一生の一部に過ぎない。本論文では，日本近代朝鮮語教育史の視点から，原物主義と人物史主義[1] によって，伊藤の経歴と著書について明らかにすることを目的とする。また，それによって，伊藤の人物像についても考える。

先行研究としては，櫻井義之による簡略な言及がある程度である[2]。この他，SUN YUNA も伊藤の略歴を示しているが[3]，櫻井の記述を踏襲したものに，伊藤の著書の序による記述等を補っているものの，簡単なものに止まっている。ホ＝ヂェヨンは『独学韓語大成 全』を影印し

1）　植田（2012:204）参照。

2）　櫻井（1979:514）。内容の重なりから見て，この記述は基本的には朝鮮公論社 編纂（1917:7）に依拠していると判断される。

3）　SUN YUNA（2009:317-318）。本論文閲覧には岸田文隆教授（大阪大学）のご配慮を得た。

解題を附している[4]。また，植田晃次は『独学韓語大成 全』の書誌学的研究を行い，その中で伊藤の経歴の大略もまとめている[5]。この他に日本語資料としての側面や，朝鮮文字の仮名表記という側面からの研究[6] は若干あるものの，伊藤伊吉の経歴や著書の全体像を明らかにした研究は管見の限りでは見られない。

2. 経歴[7]

2. 1 誕生からロシアと関った時代：静岡→北海道→シベリア・朝鮮踏査→北海道→ウラジオストック→静岡→二俣→奈良

伊藤伊吉（いとう・いきち）[8] は1863（文久3）年1月13日生まれ[9]，静岡県浜名郡白脇村白羽を原籍とする。現在の住宅地図で確認すると，伊藤姓が集中している地域である。著書では，号として白水子・白頭仙史・白頭山人などを用いている。

2歳の時，父が病死し，異母兄某が家を継いだが，母・タツ／辰子[10]（1832（天保3）年6月生まれ）は某を煩わすことを欲さず，伊吉を連れて別に一戸を成して暮らし，その頃の生活は「茅屋竹扉、僅かに膝を容れ、浣衣補裳、纔かに口を糊す」ということばで表現されている。

1880（明治13年），浜松中学校を卒業し，県令・大迫貞清の書を得て，母を奉じて北海道に渡った。北海道では，長官・黒田清隆に江差港柏樹学校教授に任じられた。同校は1878（明治11）年7月25日開校された公立の子弟教育機関であるとともに，教育指導監督機関・教員養成機関でもあった[11]。柏樹学校の創立50周年記念写真帳所収の「旧職員」の一覧には「伊藤伊吉 自至 同 十四、五、二〇 不詳」とあり[12]，1881（明治14）年5月20日に柏樹学校に赴任したことが分かる。

4） 허재영 해제（2011）。植田（2012）で指摘したように，原本の所蔵等は明記されていないが，目次1頁・本編686頁に政治大学の蔵書印が見られることから，その後身である建国大学校尚虚記念図書館蔵書の訂正増補7版（10月10日発行のほう）を影印したものと見られる。また，表紙に配された写真を見る限りでは表紙を欠き，その薄さから見て1冊の全体が写っているようには見えない。

5） 植田（2012）。

6） SUN YUNA（2009），趙堈熙（2010）。なお，『独学日語教範 全』については，吉岡（2000）でわずかに触れられている。

7） 本章は朝鮮公論社 編纂（1917:7），松島（1912:6-13）の記述をまとめた。その他を参照して補った箇所は注記した。松島は伊藤の「辱友」であり，伊藤と直接接触のあった者として彼の経歴を詳細に記述している。

8） 허재영（2011:6）では，伊吉の読みを「이요시」（植田註：イヨシ）としている。また，同氏は同頁で丸善に「마루요이」（植田註：マルヨイ）と読みをつけている。なお，植田（2012:211）では「마루요시」（マルヨシ）とあるが誤記である。ホ＝ヂェヨンの論考の日本語の読みや漢字の判読には誤りが散見されることや（植田2010:17），内省からの総合的判断により植田（2012）ではイキチと判断している。さらに，『独学韓語大成 全』（初版109頁）に，「姓ハ、伊藤ト云ウテ、名ハ、伊吉ト申シマス。」という例文があり，伊吉にはイキチとルビが振られていることからホ＝ヂェヨンの記述は誤りであるとわかる。大韓民国・国立中央図書館の検索データではこの虚偽の記述に基づき，「이요시」とされているという問題が発生している（2012年9月14日最終接続）。なお，伊吉の吉は士が土の異体字も用いられる。放天生（1940）では「これきち」とルビがある（本稿閲覧には冨田哲助理教授（淡江大学）のご配慮を得た。）。

9） 放天生（1940）では1860（万延元）年とある。なお，同年は3月18日からである。

10） 朝鮮公論社 編纂（1917:7）では辰子とあるが，それ以前に刊行された『独学日露対話捷径』訂正増補再版・同3版，『独学韓語大成 全』初版から4版の発行者には伊藤タツとあり，タツが本来の名であろう。このうち同書4版以外の奥付の発行者の箇所にある印にそれぞれ「辰」の字が見られる。なお，同書3版の印は他と異なる。

11） 江差町史編纂室（1983:925-926）。

12） 針谷（1928:4）。「同」は1881（明治14）年で，同日付で伊藤と三宅啓作の2人が採用。

さらに乙部学校長に補され，巡廻訓導を兼務した。これは「明治十三年七月函館支庁は，学校の設立・維持が容易でない地域のために「公立小学校分校及巡回学校設置手続」を定め，分校は小村等で維持困難なとき，公立小学校に付属するものとして設置し，巡回学校はいくつかの村落が協同して一名の教員をおき，各村を巡回して学習指導を行なうものとした。」ことによる[13]。同校は1878（明治11）年9月1日，在学年限5年の村落学校として開校した[14]。「開校時には山中三郎一人が教員に着任するが，山中は病気による欠勤を繰り返し，そのたびに柏樹学校から教員が臨時出張をした。また，途中から教員を二人に増員した。開校後三年三か月の間に，臨時出張による柏樹学校教員四人を含め，延べ十二人の教員が交代を繰り返した。」[15] というように柏樹学校と人員の行き来があったようである。

『乙部町史』には，『自明治十一年至明治四十五年　沿革史　第壱　乙部尋常高等小学校』（乙部小学校蔵）所収とされる伊藤による報告類が引用されている（表1[16]）。

年	題目・筆者名・要旨
1881（明治 14）	「当村入学生学齢児童ニ比シテ僅少ナル原因」（乙部学校主任教員伊藤伊吉）：学校が家から遠く，しかも道路整備がなされていないため，家族が子どもを学校に通わせたがらない。
1882（明治 15）	「民情及学校ノ現況」（伊藤）：教育を受けたことのない居住者たちがその重要性を理解せず，学校を無用視して子どもを就学させない。
1883（明治 16）	「教育ニ関シタル現況」（伊藤）：村全体に学校を評価する雰囲気も出始めた。
1884（明治 17）	「教育ニ関シタル村民ノ現況」（伊藤）：学校に通った子どもたちがその成果を家庭で示して，村民の学校への見方が変わっていく。

表1　乙部尋常高等小学校沿革史所収の伊藤伊吉による報告類

このことから，前述のように柏樹学校退職日は「不詳」であるものの，少なくとも1884（明治17）年までは乙部学校での在職が確認される。また，伊藤は中学卒業後，北海道で教員として活動し始めたものの，親たちの不安定な収入やこどもが重要な働き手であった状況とあいまって，学校という制度が定着しておらず腐心し，「算課」・「手簡」・「運算書簡及ビ日用ノ記載」といった実用的なスキルが児童に修得されることによって，徐々に教育に対する保護者の否定的態度が変化していく[17] という過程を経験したことがわかる。

北海道で教員として活動し始めた伊藤は，「居る1年」[18]，暇を得てロシアのニカラエスクに航し，黒龍江を遡り，ハバロフスク・カーメンリボロフ[19]・ニコリスク・浦塩から朝鮮の鐘城・雄基・

13）江差町史編纂室（1983:921）。

14）乙部町史編さん審議会（2001:416）。

15）乙部町史編さん審議会（2001:423）。

16）乙部町史編さん審議会（2001:421・426-428）から植田が作成。

17）乙部町史編さん審議会（2001:426-428）。

18）前述の柏樹学校の赴任日付，『独学日語教範 全』自序（1911年2月11日付）に「不佞がはじめて朝鮮の野に飲し，白頭の岫雲に嘯すること居諸が茲に二十有九年春であるが」（植田訳）とあり，1882（明治15）年と考えられる。なお，放天生（1940）では，1878（明治11）年春に朝鮮に来たとされ，齟齬がある。また，同12・3年頃にロシアで「情報部の仕事」を行い，足跡はペテルスブルグ・モスクワにも及んだという。

19）ニカラエスクはНиколаевск-на-Амуреと推定，カーメンリボロフはКамень-Рыболов。

鏡城に至って帰還する。そして,「男児身を立つ、宜しく実業を以てすべし、焉ぞ碌碌村夫子を以て居るべけんや」と意を長官に告げて辞職する。

教員を辞めた伊藤は，母を奉じて再びウラジオストックに渡り,「露商の番頭」となり，その後自ら行商を営む。その後，市の長者アレキサンドル・ゾルヅーヒン[20]の斡旋で，朝鮮半島北部地方の「生牛」を市の兵営に販売する仕事を数年行っているうちに風土病に罹り，業務ができなくなる。

朝鮮半島から引揚げ，静岡に戻り静養の傍ら私塾を開く。その後，二俣に移った後，奈良に遊ぶ[21]。ロシア皇太子来遊の際には，接伴委員となる。1891（明治24）年，大津事件（湖南の変）を契機に，『独学日露対話捷径』を編纂，1892（明治25）年に発行する。同書は1910（明治43）年までに3版を重ねる。

2．2　朝鮮と関った時代：東京→三丹州→ロシア→元山→東京→浜松→京城→静岡→京城→釜山

1892（明治25）年，上京し神鞭知常・小室信夫・河瀬秀治・近衛公爵ら政財界人と知遇を得る。また，対韓策を建て同人間を周旋する。1893（明治26）年，神鞭の選挙区にある宮津港が特別輸出港[22]となり，神鞭が小室･河瀬らと日露韓貿易会社を組織するのに伴い，三丹州に入り，株式を募集した。その際，幻灯機などを用い，ロシアの風物を説明したという。同年6月16日，同社は与謝郡地域ぐるみで創立され，当初の計画では，宮津とウラジオストック・元山･釜山を汽船と帆船で結び，石材･「食牛」･米・雑貨を輸出，大豆・漁獲品・牛皮牛骨･雑貨を輸入する他，漁業部を設けて沿海州・釜山近海で試漁を行うことを事業計画としていた[23]。大津事件後，ロシアの軍艦に同乗して海南島に行き，港湾･水路を調査し，伊藤博文らに報告したという[24]。1894（明治27）年にはロシアへの，翌年には朝鮮への商況視察に出向き，元山では雑貨店を開き大豆の買収を始めた[25]。同社の総支配人となった伊藤は，母を奉じて朝鮮に赴き，元山を本拠として，開港場以外への他国船の出入りが禁じられていた当時に，北は豆満江から南は釜山港まで沿岸貿易に従事し奇利を博したという。しかし，同社の経営は初航海での大風との遭遇，日清戦争勃発，戦後の朝鮮への商況視察の際に発生したコレラの流行や飢饉によって必ずしも順風満帆であったとはいえなかったようである[26]。1897（明治30）年には同社は京

20） ヅの濁点は原文では半濁点である。『独学韓語大成 全』では，これを無声音・有声音に関らず ㅌ・ㄷの発音表記に充てている（例:155・156・166・401頁）。

21）『独学日露対話捷径』の阪本彭之助の序には「就官奈良県」とある。

22） 松島（1912:8）では特別輸出入港。

23） 宮津市史編さん委員会（2004:805-806）, 宮津市史編さん委員会（2001:756-760）。

24） 放天生（1940）。

25） 宮津市史編さん委員会（2001: 741-742）。無署名（1893:13-14）にも同社設立のため，借入れた船で「本月廿日頃」宮津港からウラジオストックに渡り，約1週間滞在後，元山を回るが，実地視察を兼ね社員4･5名が乗込む予定であるとされている。

26） 宮津市史編さん委員会（2004:806），宮津市史編さん委員会（2001: 741-742）。

都に移転，1899（明治32）年7月の臨時株主総会では元山支店の休業が決議，日露戦争開戦後は事実上休業状態となり，日露戦争後も経営は好転しなかった上に，元山・城津に所有していた土地・建物の横領事件が生じて，1907（明治40）年7月に至って解散した[27]。土地・建物の整理を委嘱された際の伊藤の肩書は元当社元山支店支配人であった[28]。なお，元山民会議長，同商業会議所長も務めたとされるが，1898（明治31）年に商業会議所議員と居留地会議長を務めた[29]ことがわかっている。また，1899（明治32）年には元山の地所借入に関わり，功労に対し報酬金50円を下付された他，「実際奔走ニ費シタル金五拾円三拾銭」を機密金で支弁されたようだ[30]。

この間，1895（明治28）年10月8日に閔妃殺害事件が起こり，「商業杜絶」したため，仁川の福井三郎らと雞林奨業団を組織したところ，これが評価され，松方内閣から機密費を給された。雞林奨業団とは「韓半島を十六大区七十五小区に区分し、要所に事務所を置き、武器を備へ、平素は散して商業に従事し、一朝事あらば起て之に応ぜん」[31]とする「武装行商団」[32]であるという。「日本の商権を回復し併せて奥地行商の統制と奨励を図る」ことを目的として，1896（明治29）年4月29日在仁川日本領事館の認可を受け，5月17日に仁川で結団され，その事業の奨励・拡張が日韓貿易の伸張・発展に資すると判断され，日韓貿易に関する事項調査嘱託名目の報酬が1897（明治30）年4月から1年分として10000円下付されたが（上述の機密費か），実際は「殆ド詐欺同様ノ方法ヲ以テ貧民ノ銭品ヲ貪ル」ような「粗暴放漫」を行っており，補助金を出した領事館の厳しい監督下に置かれることになったため，1898（明治31）年に解散した[33]。

北韓一帯の防穀令[34]により，商業が不振になる中，慶尚道・迎日湾から米穀を積み豆瞞［ママ］江に赴くも，暴風により損失を受け，「北韓貿易」から撤退する。

母を奉じて東京に戻るも，神鞭・近衛らは既になく[35]，同人の多くは凋落していた。そこで浜松に戻り，「客を謝して一書を編纂」したものの書賈に顧られず筐底にしまわれた。ところが，1904（明治37）年，日露戦争が勃発し，韓国が保護国になり，1905（明治38）年に『独学韓語大成 全』として印刷したところ，たちまち数千部を尽くした。同書は1911（明治44）年までに

27）宮津市史編さん委員会（2004:807），宮津市史編さん委員会（2001:767）。

28）宮津市史編さん委員会（2001:766）。

29）高尾（1916:257），町田（1942:240）。

30）「元山付近地所買収に付同港居留民伊藤伊吉に内名［ママ］ありたるや否内田政務局長より問合の件」（レファレンスコード:C10062258300），「元山に於ける地所借入に関し功労者報酬金回送の件」（同:C10062256900），「表紙「明治32年以来　韓国元山地所編冊　機密」」（同:C10062258100），「元山付近買収地所取調報告並報告書中の1部地所借入契約を為すべき否外務大臣より照会の件」（同:C10062258400），「牛尾大尉より地所買収始末上申の件」（同:C10062258700）以上，国立公文書館アジア歴史資料センターウェブサイト，2012年9月22日最終接続。

31）松島（1912:9）。

32）孫禎睦（1980:91）。

33）仁川府（1933:1047-1048）。認可年が「明治三十九年」とあるが誤記と見られる。

34）1901（明治34 ）年8月25日実施のものと推定される。町田（1942:77-78・209）参照。

35）神鞭の死去は1905（明治38）年であるので，東京に戻ったのはそれ以降と見られるが，以下の記述と齟齬がある。

7版を重ねた。

1908（明治41）年に東洋拓殖会社が「創織」されると同時に入社，参事となり京城に転居するが，「母既に老ひて、君に従ふこと能はず」，家を静岡に移し母を安んじた。しかし，東拓の方針を「如斯は唯だ会社を利するのみ、鮮地に益なし」として辞職し，静岡に帰る。屏居数月して執筆し，1912（明治45）年に『独学日語教範 全』を刊行する。

1912（大正1）年11月，再び朝鮮に渡り，（株）朝鮮奨産所を興こし所長となり，1917（大正6）年現在その職にあったようだが[36]，没年を始めその後の足取りは詳らかではない。なお，上原専一から後藤新平に宛てた書翰「朝鮮在住伊藤伊吉の紹介状」[37]には，朝鮮奨産所所長・日本語通信教授国語界主幹の肩書で，京城府寛勲洞元表勲院居住とする伊藤の名刺が付してある。居所からは1917（大正6）年前後の書翰と推定されるが（表2参照），年の記載がない。当時，日本語教育雑誌を主宰していたようである。また，1940（昭和15）年には釜山・海雲台に健在であった[38]。

この間，夫人・喜美子（1883（明治16）年2月生[39]）との間に，二男三女をもうける（＜伊藤伊吉年譜＞参照）。また，母は1912（明治45/大正1）年現在，81歳で健在であった。

伊藤の著書や人名録で判明した限りの居住地の変遷を示せば表2の通りとなる。

年月日	居住地	典拠[40]
1892（明治 25）年 2 月	南都水門	『日露』初版自序
1892（明治 25）年 8 月 27 日	東京市神田区今川小路 2 丁目 12 番地寄留	『日露』初版奥付
1906（明治 39）年 3 月 8 日	静岡県浜名郡浜松町元城 32 番地	『日露』訂正補増［ママ］再版奥付
1909（明治 42）年 4 月 20 日	静岡県浜名郡浜松町元城 32 番地	『韓語』4 版奥付
1909（明治 42）年	京城中部貫洞 12	京城新報社 編纂（1909）
1910（明治 43）年 3 月 6 日	静岡県静岡市西草深町 58 番地	『韓語』訂正増補 5 版奥付
1912（明治 45）年 3 月 28 日	静岡県静岡市水落町 1 丁目 14 番地	『日語』奥付
1917（大正 6）年	京城府寛勲洞表勲院	朝鮮公論社 編纂（1917）

表2　伊藤伊吉の居住地の変遷

3. 著書

『独学日露対話捷径』の「自序」によれば，夙にロシアに渡航した際には英語を習得していたようである。しかし，「随聴随記積テ数冊子ヲ為セリ」（『独学日露対話捷径』「自序」），「商事ノ余暇常ニ言語ノ研鑽ニ志シ」（『独学韓語大成 全』の伊藤による序文）というように，ロシア語・朝鮮語は正規の学校教育によって習得したものではなく，実地の活動の中で身につけた

36）朝鮮公論社 編纂（1917:7）には，この肩書とともに「現住所　京城府寛勲洞表勲院」・「機械、著述、農事、鉱業」とある。

37）『後藤新平記念館所蔵後藤新平書翰集』（DVD）雄松堂書店 制作・発売，2009年。

38）放天生（1940）。

39）長女の誕生が13歳の時となり，何らかの誤記の可能性がある。

40）『日露』・『韓語』・『日語』は『独学日露対話捷径』・『独学韓語大成 全』・『独学日語教範 全』。

もののようである。伊藤は実践の中で身につけたロシア語・朝鮮語を元手に3冊の学習書，それもそれぞれ大部の独学書を編む[41)]。

3．1　『独学日露対話捷径』

3．1．1　編纂の経緯

同郷の「辱友」松島廉作は『独学日語教範 全』の序で，「湖南の変」に際し，「君乃ち喟然として歎じて曰く、日露の間、是より当さに多事なるべしと。因て一書を編集」したのが本書であるとしている。具体的な成立過程については，伊藤自身が本書の自序で，以下のように述べている。シベリア鉄道の竣工が迫り，ウラジオストックと長崎・敦賀・小樽との航路が開かれた社会的情勢の中，「言語談話ノ交際間ニ必要」である。自身はシベリアで「其初片言隻語悉是鴃舌ノミ」であった。日本を発つとき，「世界ノ通語」である英語がわかるので，「到処意ヲ通シ情ヲ迎フルニ足ル」と考えていたが，やはり同様に「鴃舌ノ憾」を感ずるものであった。そして，「旦ニハ地ニ画シタニハ手ヲ形リ隔靴掻痒僅カニ彼語ヲ晤ルヲ得」た。爾来「隨聴隨記」によって集めたものを1冊にして本書と為したというものの，何らかの種本に基づいた可能性もある。

さらに「此書惟リ邦人ノ露語ヲ学ブニ供スルノミナラズ又露人ヲシテ邦語ヲ知ラシメントスルノ設案ナレバ此ニ依テ他日神霊ノ倭語ヲ悉伯利地方ニ布演スルノ階梯タラバ豈亦一大快事ナラズヤ」と述べ，ロシア語話者の日本語学習書として使用されることも企図したことが明らかにされている。語彙・日本語訳にキリル文字による日本語の発音が付記されているのはこの反映であろう。

3．1．2　刊行状況と書誌

『独学日語教範 全』の松島廉作による序では，本書について，「書成る、四方争ひ求め、忽にして数版を重ぬ。」とされている。管見の限りでは，表3のように，訂正増補3版までの刊行が確認された。

版	発行日	所在
初版[42)]	1892（明治 25）年 8 月 27 日	国会（デジタル）・函館
訂正増補再版	1906（明治 39）年 3 月 8 日	国会（デジタル）・函館・大阪府・堺・長崎
訂正増補 3 版	1910（明治 43）年 7 月 30 日	国際日本文化研究センター図書館

表3　『独学日露対話捷径』の刊行状況と所在[43)]

41）インターネット上には大塚栄四郎『半島経営談』伊藤伊吉（1897年）というデータが見られるが，現物は確認できない。

42）近代デジタルライブラリーで見る限り，国立国会図書館蔵（YDM84623）では廿七にあたる部分が二重線と三十という墨書と見られるもので訂正されている。

43）インターネットによる検索では他館にも所在が確認できるが，データの流用入力によるためか，しばしば原物と異なった版次等が示されている場合があるため，ここでは原物を検見し得たもののみ示す。都道府県・政令指定都市立図書館は自治体名を示す。なお，国立国会図書館蔵はデジタル化資料である。

表紙は訂正増補再版（函館市立中央図書館蔵）ではやや深い緑色で縦191×横127mm，背表紙に金文字で「独学日露対話捷径」とあり，その上部に「САМОУЧИТЕЛЬ ／ Русско-Японскаго ／ и ／ Японско-Русскаго ／ ЯЗЫКОВЪ」とある。また，訂正増補3版（国際日本文化研究センター図書館蔵）の表紙は小豆色である。初版の表紙については不改装のものを検見し得ていない。版別の書誌は表4の通りである。

	初版	訂正増補再版	訂正増補３版
頁　数	476 頁	591 頁	591 頁
印刷所	秀英舎	会社株式[44] 東京築地活版製造所	会社株式東京築地活版製造所
発行者	伊藤伊吉	伊藤タツ	伊藤タツ
発売所[45]	毎日新聞社	丸善株式会社書店 丸善株式会社支店	丸善株式会社書店 丸善株式会社大阪支店 丸善株式会社京都支店 ヤンコーフスキイ書店
定　価	1.50 円	2.50 円	2.50 円

表4 『独学日露対話捷径』の版別書誌

『独学日露対話捷径』は，市川文吉が閲している。以下，山岸（1940）・原（1940）に依拠して市川の経歴をまとめる。市川は1847（弘化4）年生まれ，1865（慶応元）年に初の幕府露国留学生6人の1人として遣露されペテルブルグで学ぶ。明治維新後も滞露，プチャーチンの下に寄留し，1869（明治2）年より明治政府の外務省留学生として1873（明治6）年までロシアに暮らした。帰国後は文部省，東京外国語学校等に奉職後，榎本武揚に随行して在露公使館に5年勤務，榎本の帰国に同行し，帰任後は外務省・文部省の御用掛となり，再度東京外国語学校に勤める。1884（明治17）年に文部省，1885（明治18）年に外務省を免ぜられ，同年東京外国語学校の廃止により，1886（明治19）年に黒田清隆の訪欧に通訳として随行，翌年帰国した。当時40歳であるが，後は官途に就かず，熱海・小田原・伊東で隠遁生活を送り，1927（昭和2）年に81歳で没した。

従って，本書を閲したのは隠遁生活に入って数年後の頃である。榎本と市川は「交際は終始頗る親密であった」[46] こと，榎本は『独学日露対話捷径』･『独学韓語大成 全』の2冊に題字を寄せていることなどから見れば，榎本を介して，伊藤と市川の間に接点があった可能性がある。

訂正増補再版では訂正増補再版自序が追加されている[47]。ここで伊藤は日露戦争後，「語言ノ会得意思ノ交換ヲ以テ時務ノ急志士ノ要トナス」とし，「日露両帝国ノ同志ニ資セントスル」ため増補再版を行ったと述べている。また，「之レニ依リテ意気相投合シ彼此相提携シテ流血

44） 本書は左開きで，縦書の日本語は左から右に書かれている。

45） 再版は発行所，3版は発売書肆。

46） 原（1940:91）。

47） 訂正増補3版には3版の序は付されていない。

漂杵ノ惨ヲ未然ニ防遏シ亜洲ノ黝雲ヲ一掃スルニ至ランコトヲ斯クテ我文化ノ普及シテ産業茲ニ挙リ所謂利用厚生ノ道ニ協フコト」を望んでいる。

また，訂正増補再版の際に以下のような宣伝文句で新聞広告が出されている[48]。

「戦争は終れりと云ふも将来露国との交渉は益々逼迫し商業上に又た政策上に有らゆる方面に於ける関係は愈々結んで永く解けざる可きがゆゑに東亜の舞台の立役者たらんとする邦人は此有力なる東洋語たる露国語に通ずる母語及英語と等しからざる可からず伊藤君の正確にして且簡易なる独修書は此必要に促がされ更に増訂再版したり苟くも大飛躍を志す諸君は必ず案頭に置くべき最良語学書なり」

591頁の本書が「簡易なる独修書」とは言いがたい。とはいえ，この記述は本書が当時の時流に乗った本であったことをよく表している。

3．1．3　構成・その他

初版では全73章から成るが，訂正増補再版・同3版では72章「仕立屋ニ於テ」，75章「軍事ニ就テ」が加えられ全75章となる。この2章分の追加により72から75章の配列が調整されている。各章は1章「文字」から3章「綴字法」が文字・発音について，4章から54章は「語法」と題された文法・例文を提示する章と「人代名詞」・「建物及家財」等と題された語彙を提示する章が混在，55章以下は「商店ニ於テ対話」・「賓客ト談話」等と題された対話文から成る。

伊藤の著書にはいずれも巻頭に多くの題字・序が寄せられている。これらが寄せられているからといって，著者自身とその人物との関係がどの程度のものかわからないのは現代の事情と同様であろう。しかしながら，著者の人間関係・ネットワークの一端を示す材料ともなる。

本書では，勝海舟，榎本武揚，小牧昌業，副島種臣といった錚々たる政治家と稲垣万次郎といった外交官6人が題字・序を寄せている。

なお，初版では2頁49箇所の正誤表が付されているが，校正等に十分な時間をかけずに出版されたことが推測される。また，訂正増補再版（函館市立中央図書館蔵）には4頁102箇所の正誤表が付されている。しかし，訂正増補3版ではこの誤りについて14箇所を除き訂正されておらず，残りは未訂正か何らかの齟齬があるままになっている。

3．2　『独学韓語大成 全』[49]

3．2．1　編纂の経緯

『独学日語教範 全』の序（松島廉作）は以下のように言う。伊藤は「北韓貿易」から撤退して東京に戻ったが，かつての後盾となった政財界人や同人も頼れなくなっていた。浜松に戻った伊藤は,「客を謝して一書を編纂」, 本書を執筆したものの書賈に顧られず筐底にしまわれた。

48）『東京朝日新聞』（東京朝刊）1906年4月14日付(1)。

49）本書の書誌学的事項は植田（2012）が詳述しており，本節はそれと重複部分がある。

ところが，1904（明治37）年，日露戦争開戦，韓国保護国となり，「喜び禁ずる能はず」印刷に付したところ，「忽ちにして数千部を尽く」した。

序に「我が邦人が韓語を学ぶに適せるのみならず韓人の我が邦語を究めんとするにも大なる指南車たるべきものたり」（江原素六），「唯邦人の韓語を研究する指南車たるのみならず韓人の日語を学習するに資する設案」（山座円次郎）という通り，朝鮮語話者の日本語学習にも用いることが想定されている。第2･3編の日本語訳の部分にルビが振られているのはこの反映であろう。

3．2．2　刊行状況と書誌

上述のように初版は「忽ちにして数千部を尽く」したというが，管見の限りでは，表5のように，訂正増補7版までの刊行が確認された。なお，訂正増補7版には発行日の異なる2種類がある。

版	発行日	所在
初版	1905（明治 38）年 8 月 28 日	東京・石川・山口・鹿児島・秋田・愛媛・札幌
2 版	1907（明治 40）年 10 月 25 日	和歌山
3 版	1908（明治 41）年 9 月 20 日	大阪府
4 版	1909（明治 42）年 4 月 20 日	大阪大学外国学図書館
訂正増補 5 版	1910（明治 43）年 3 月 6 日	奈良・栃木（2 冊）・鹿児島
訂正増補 6 版	1910（明治 43）年 7 月 15 日	千葉・神戸
訂正増補 7 版 a	1911（明治 44）年 10 月 7 日	長崎
訂正増補 7 版 b	1911（明治 44）年 10 月 10 日	新潟・和歌山

表5 『独学韓語大成 全』の刊行状況と所在

表紙は版により色が異なる[50]。同版で装丁や色が異なっている可能性も排除できないが，改装されていないものは，原則として初版では緑色乃至深緑，2版では黄土色，3版では薄いこげ茶色，4版では黄土色，訂正増補5版では黄土色乃至黄金がかった茶色乃至こげ茶色，同6版では黄土色に近い茶色，2種類が存在する同7版ではともにこげ茶がかった黄土色である。ただし，同色名で示したものでも明暗濃淡に色調の違いが見られることもある。改装されていないと思われる初版（愛媛県立図書館蔵）では，縦226×横149mm，背表紙に金文字で「独学韓語大成　全　伊藤伊吉著[51]」とある。また，訂正増補5版以降は「訂正増補独学韓語大成　全　伊藤伊吉著」となっている。韓国京城正三品秘書院丞の李秉昊が閲している。李については経歴や伊藤との接点は不明である。

版別の書誌は表6の通りである。

50）表紙については植田（2012:208）で詳述されており，ここではそれに依った。

51）「著」は請求記号表で隠れているが，他の初版により確認した。

	初版	再版	3版	4版	訂正増補 5版	訂正増補 6版	訂正増補 7版
頁　数	596頁				686頁		
印刷所	株式会社東京築地活版製造所						
発行者	伊藤タツ				小柳津要人 （丸善株式会社専務取締役）		
発行所	丸善株式会社・ 丸善株式会社支店	丸善株式会社・丸善株式会社大阪支店・丸善株式会社京都支店					
定　価	2.00円[52]						

表6　『独学韓語大成 全』の版別書誌

当初，発売に当っては，『独学韓語大成見本』[53]という小冊子が作成され，宣伝･予約販売された。ここでは，「予約申込及代金払込所」として，「静岡県静岡市呉服町　吉見書店　同浜松町連尺　谷島屋書店」が挙げられ，明治38年3月25日限が「製本出来期限」となっている。また，発行所として，「静岡県浜名郡浜松町元城三十二番地　独学韓語大成発行事務所」が記されているが，この住所は本書初版から4版の奥付にある伊藤の住所に一致する。

刊行の約7ヵ月後には，広告とともに巻頭所収の山座円次郎の序が「韓語大成に序す」と題して雑誌に転載されている[54]。また，発行所を同じくする『韓語通』（前間恭作，1909年）の巻末に「唯一の韓語独修書」と銘打たれた広告が付されている。さらに，『韓語通』と併せて「日韓合邦と朝鮮語」というタイトルの新聞広告も出され，「朝鮮に行け、朝鮮に行け、朝鮮は最早外国に非ざる也、未拓の美田、未知の天産、到る処に埋もれたる国富は有為なる日本人諸君の来るを待てり、朝鮮は閉ざゝれたる宝庫也　今や此宝庫の富は諸君に提供せられて諸君の腕次第割取するに任す、但し如何なる才人も豪傑も鍵なくんば如何にして宝庫を開くを得べき、諸君は此鍵を忘る可からず、此鍵を携へて朝鮮に行けよ、無限の国富を埋蔵する美しき山河は笑つて諸君の来るを迎ふ此閉ざゝれたる宝庫の鍵とは即ち韓語大成及び韓語通の二書にして、此二書だにあらば八道山河到る処に横行して富を攫むを得べき也」と謳われている[55]。この広告文は当時の雰囲気や本書が当時の時流に乗った本であったことを伝えている。本書が一攫千金を夢みて朝鮮に渡る「諸君」の朝鮮語修得にはかなり大部である点，また『韓語通』は実用書というより文法書である点などを併せてみれば，両書が「閉ざゝれたる宝庫の鍵」と成りえたのか疑問が残る。寧ろ6年で7版を数えた点と併せ見れば，本書が商業出版物であり，その販売促進の文言としての側面，また，それによる売れ行きが浮かび上がってこよう。

52）植田（2012）によれば，初版で改正定価金三円という紙片が貼られているものがある。

53）『独学韓語大成見本』（株式会社東京築地活版製造所印刷）。

54）『満韓時報』3（1906年3月15日付9･14面）。些少な文言の異なりがある。

55）『東京朝日新聞』（東京朝刊）1910年8月30日付(1)。引用にあたって傍点は略した。

3．2．3 構成・その他

第1編「文字語法及連語」，第2編「会話」，第3編「単語」の3部構成となっている。1編は全9章，1･2章で「諺文」･「綴字法」と題して文字発音を，3章で「数字用法」と題して数詞を，4から9章では「語法及連語」と題して文法事項や言い回しを扱っている。2編は全17章，章ごとに「応接ノ事」･「飲食ノ事」などと題した会話文を提示している。3編は全21章，章ごとに「数字及単位称呼」･「形容詞」等と題した語彙リストで構成されている。3章末に附として「日本仮名字」が付されている。

第一編の前には目次にはないが緒言がある。

訂正増補5版からは，巻末に増補として日本仮名文字使用法･官衛官職及各種職業･農事用法･動詞活用が付される。

本書では，榎本武揚，大鳥圭介，小牧昌業，江原素六，亀井英三郎といった政治家と山座円次郎といった外交官，渋沢栄一といった財界人，陸実といった政治評論家，日本に好意的な韓国の政治家・官僚・外交官である李址鎔，閔丙奭，趙民熙ら13人が題字・序を寄せている。訂正増補5版からは前年に第2代韓国統監に就任した曽根（曽禰）荒助の題字が最冒頭に加えられ14人になっている。訂正増補5版以降で2番目（楽児の印あり）・5番目（不明）にあたる題字は書き手が判明しなかった。

なお，日本朝鮮語教育史の基礎研究を行った梶井陟[56]が『語法文法朝鮮語大成』（奥山仙三）を評して，「『韓語大成』以来の大冊」としたように，本書は当時の学習書類では群を抜く大部のものである。とはいえ，初版で既に4頁に渡り174箇所の正誤表が付されているなど校正等に十分な時間をかけずに出版されたことが推測される。

本書には以下のような例文がある（109-110頁，ルビを略した日本語訳のみ示す）。

「君ハ、姓名ガ、何ト申シマスカ。／姓ハ、伊藤ト云ウテ、名ハ、伊吉ト申シマス。／何ンナ字ヲ、書キマスカ。／伊ト云フ伊字、藤木ノ藤字ト、伊ト云フ伊字、吉キ吉字ヲ、書キマスル。／父母、皆、オ在リナサレマスカ。／父親ハ、既ニ、逝去マシテ、母親バカリ、在リマスル。／慈堂ハ、年歳ガ、幾許バカリニ、成リマシタカ。／七十三歳デゴザリマス。／公ハ、齢ガ、幾許デゴザリマスカ。／四十二歳デゴザリマス。／何ノ生レデスカ。／癸亥生デス。」

この部分と伊藤自身の境遇を併せ見れば，まず父を亡くし母のみ健在であることが一致する。次に本書の初版の刊行年である1905（明治38）年を基準に見ると，伊藤の生年1863（文久3）年は癸亥年で42歳，母は1832（天保3）年生まれで73歳となり，満年齢ではあるが例文の記述と一致する。さらにこどもについて「童息ガ二人ト，童女一人有リマス。」（111頁）という例文があり，これも当時の伊藤の家族構成に一致する。

このことから，本書の例文の記述には伊藤自身に関する事項を始めとし，事実や経験が反映されている文がある可能性がある。ただし，「童息ガ、幾齢デスカ。／五歳ニ、ナリマス。」（113

56）梶井（1979:574-575）。

頁）という例文があるが，当時，伊藤の息子は2歳と3歳で合致しないというような場合もある。

3．3 『独学日語教範 全』

3．3．1 編纂の経緯

『独学日露対話捷径』・『独学韓語大成 全』とも日本語学習にも用いることが想定されていることを先に指摘した。本書は一歩進んで朝鮮語話者の日本語学習を企図したものである。

伊藤は自らの著書で以下のような言語観を披瀝している。

「交誼ヲ修ムル者ハ其志尚ヲ詳悉シ其志尚ヲ詳悉セントスル者ハ先ヅ其意思ヲ通暁シ其意思ヲ通暁セントスル者ハ先ヅ其語言ヲ討究ス是言語談話ノ交際間ニ必要ナル所以ナリ処世ニ缺クベカラザル所以ナリ」（『独学日露対話捷径』自序）

「融和敦睦ノ道ハ情誼投合スルニ在シ情誼投合ノ方法ハ言語相通スルニ在リ」（植田訳，『独学韓語大成 全』自序）

すなわち，言語を理解し合うことはコミュニケーションや処世に必要であるというプラクティカルな言語観が見出せる。伊藤は続けて朝鮮人の「七八朔講習」は日本人の「三年의研鑽」（三年の研鑽）より勝るとも述べている。また，日本語普及については，韓国併合を受け，「韓国の事大に定る、今後の要は韓民をして日本化せしむるにあり、而して之を為すの道、其れ唯だ彼をして日本語を用ひしむるにあり」と述べたという（『独学日語教範 全』の松島による序）。

このような言語観の再解釈については4.3で行う。

1908（明治41）年に入社した東洋拓殖会社の方針に異を唱えて辞職し，静岡に帰った伊藤が数ヶ月に渡って執筆し韓国併合の2年後に刊行されたのが本書である。

3．3．2 刊行状況と書誌

管見の限りでは，1912（明治45）年3月28日発行の初版のみ刊行が確認された。3版を重ねた『独学日露対話捷径』，7版を重ねた『独学韓語大成 全』のようには売れなかったようである。

以下2館の蔵書を実見した。国立国会図書館蔵はデジタル化資料のため，表紙の色調などは不明である。東京外国語大学附属図書館蔵は改装されているため同じく原表紙の様子は不明である。東京外国語大学附属図書館蔵では，改装された表紙は縦222×横147mm，巻頭の題字1枚目（寺内正毅）の実測値は縦218×148mmである[57]。背表紙の状況も不明である。ともに頁数900頁，印刷所は㈱東京築地活版製造所，発行者は中里こま，発行所は不記載，定価は2.50円である。発行者の中里こまについては不明である。奥付に静岡県静岡市鷲匠町3丁目110番の住所が記載されており，同じく奥付に住所が記された伊藤とは同市内在住である。また，奥付には所謂発行所の記載がない。奥付裏に「発売所」として，京城の釘本商店・白水舎事業部，釜山の吉見商店，元山の三倉商店が示されているが，これは取扱書店という程度の意味であろう。

57）改装表紙の横は溝までの長さのため，題字1枚目の横より短い値となっている。

このうち，白水舎事業部は伊藤の号のひとつが白水子であることから，伊藤となんらかの関係がある業者である可能性がある。

国分象太郎（1862-1921）が校閲している。国分は対馬出身で韓語学所，東京外国語学校朝鮮語学科等に学び1885年京城領事館御用掛兼裁判所書記心得となり，外交官・通訳官として，また韓国統監府や朝鮮総督府の官僚として活動した人物である[58]。弟・国夫による朝鮮語学習書『日韓通話』（1893（明治26）年初版）に巻末の増補を付け加え，増訂（1908（明治41）年増訂6版発行）を行っている。伊藤と国分の間にどのような接点があったのかは不明である。

3．3．3　構成・その他

本書は『独学韓語大成 全』に倣った構成を採り，第1編「文字、数字用法、語法及連語」，第2編「会話」，第3編「単語」の3部構成となっている。1編は全9章，1章・2章は「仮名文字」・「仮名字使用法」と題して文字発音を，3章は「数字使用法」と題して数詞・助数詞を，5章から9章は「語法及連語」と題して文法項目とその例文を扱っている。2編は全19章，章ごとに「応接ノ事」・「飲食ノ事」などと題した会話文を提示している。3編は全24章，章ごとに「数字及単位称呼」・「形容詞」等と題した語彙リストで構成されている。

ホ＝ヂェヨンは，伊藤について「ロシア語を勉強し，‘日露対訳書’を著したことがあり，この経験をもとに日韓対訳書である＜韓語大成＞を作った。」（植田訳）と根拠を示さずに述べているが[59]，3書の構成を対比するに，『独学日露対話捷径』の経験を基に『独学韓語大成 全』を編んだというより，『独学韓語大成 全』の経験を基に『独学日語教範 全』を編纂したというほうが至当であるように思える。

本書では，題字・序を寺内正毅，松平直平，小松原英太郎等の政治家，松井茂等の統監府官僚，評論家・政治家の徳富蘇峰の他，友人・知人である松島廉作，朴承祖，李晩奎，葭浜忠太郎等も寄せていることが前著2冊とは異なる点である。合計12人のものが収められている。なお，葭浜は元山に30年以上在住し元山商工会議所理事・会頭などを務めた人物である[60]。2番目（純堂の印あり）・3番目（一正の印あり）の題字は書き手が判明せず，5番目の趙応重については勲一等子爵とあるが詳細は不明である。

なお，本書もまた900頁の大部である。前述のように，朝鮮人の七八朔講習は日本人の三年の研鑽より勝るとしても，朝鮮語話者の日本語修得にどれほど実効性があったのかは疑問が残る。

58） 石川（2005:35-39）。

59） 허재영（2011:6）。

60） 町田（1942:238･248）。

4. 伊藤伊吉の人物像

4. 1 母への思い

伊藤の著書で目を引くのは，序などでしばしば繰り返される「母を奉じて」という句である。伊藤自身も『独学日露対話捷径』自序で「不肖慈母ヲ奉シ」と述べている。松島（1912）によれば，北海道・ウラジオストック・元山・東京へと少なくとも4回遠方に母を奉じている。伊藤が母を奉じてウラジオストックに渡ったと見られる1882（明治15）年の2年後の人口統計に基づき，在住日本人の女子が男子の約2倍という変則的な男女比を根拠に「かなり早い時期に、もうすでに相当多数の日本人売春婦が同港にやってきていた」と倉橋正直は推測している[61)]。温暖な静岡から北海道へ，さらには自然環境も厳しいのみならず，このような環境のウラジオストックに伊藤の母は奉じられ，その後も伊藤の転居に伴い元山・東京へと奉じられている。また，松島はその後の静岡での母を安んずるための気遣いも並々ならぬ筆致で描写している。1章で見た伊藤の生育環境，厳しい環境の地への同行，篤い気遣いから母へのただならぬ思いが感じられる。著書の一部で発行者を母としていることと共に，本拠を移す度の如く，如何なる環境の地であろうと，伊藤が母をなぜ奉じたのか，母はなぜ奉じられたのかという母への思いは伊藤の言動や著書，その人生を理解するひとつの関鍵といえよう。

4. 2 伊藤の人生のパターン

伊藤の人生を見れば，職業上での失敗や困難に当たり，その直後にそれまで習得した言語を元手に沈潜して執筆にいそしみ，好機が来るや出版するという浮沈を繰り返す生涯を送ったと言えよう。松島が伊藤を「奇傑の士にして同時に篤学の人」（『独学日語教範 全』序）と評しているように，実践で得た言語能力を整理して記述できる力を持ち，商機を見た執筆・出版を行う，まさに機を見るに敏な人物像が浮かび上がる。

このような人生の表面には現れないが，多くの言語や各地の事情に通じた伊藤は，現地についての情報収集などで，非常に便利な人物であったと思われる。こういった点に関しては，「雞林奨業団」やロシア・海南島での活動等があるが，検討できなかった。

4. 3 伊藤の言動の再解釈の可能性

ホ＝ヂェヨンは，『独学韓語大成 全』に見られる旅順陥落を記念して神州紀元二千五百六十五年と表現した点を捉え，帝国主義膨張政策を反映した教科書と解釈している。確かに伊藤の言には，彼の言語観について上掲した点を始めとし，「帝国主義的」と解釈されうる言動が散見される。たとえば『独学日語教範 全』の松島の序には「日露戦役起り、我軍連戦連捷、韓国終に我保護国となる。時に君浜松に在り、喜び禁ずる能はず、我が志将さに成らんとすと、

61） 倉橋（1989;2000新装版:22-25）。

因て「韓語大成」を出して印刷に付す」[62] という記述がある。しかし，これを伊藤の人生の中で捉えなおし，同書が「商業出版物であるという特性」[63] を考慮した時，時代の雰囲気に加え，伊藤にとって「客を謝して一書を編纂」したものの書賈に顧られず筐底にしまわれていた原稿が売れる時が来たということに対して「喜び禁ずる能はず」であったと再解釈することが可能である。

『独学日露対話捷径』や『独学韓語大成 全』で日本語学習にも用いられるよう配慮されていることも，「韓民をして日本化せしむる」ため日本語普及に関心を持っていたと捉える他に，商業的に見ると，対象読者を2倍にして単純計算で2倍の売れ行きを見込んでと再解釈することもできよう。

3.3.1で見たように商人・伊藤にとって言語は「処世ニ缺クベカラザル」ものだったという点を念頭に置けば，『独学日露対話捷径』が3版とまずまずヒットし，『独学韓語大成 全』は7版と大ヒットし，『独学日語教範 全』で三匹目のどじょうを狙ったが思惑通りにはいかなかったと再解釈することも可能となる。

5. おわりに

本稿で見た伊藤伊吉のように，人間の人生は多様な要素が絡み合って織りなされている。その一面のみ見て，現代的視点から解釈することはたやすいが，それはまた木を見て森を見ない危険性をも持つ。

日本近代朝鮮語教育史の視点から見る際，伊藤はその人生の一部で朝鮮と関わり，それを元手のひとつとしてより豊かな自己の生を追求したという視点を欠くなら，その時ごとに個々の生を歩んでいた有名無名の個々の人々をあたかもまとまった総体のように捉えてしまう可能性がある。すなわち，例えばその大部さでは現代の朝鮮語教材にも稀な『独学韓語大成 全』を著していることを以って伊藤を朝鮮語研究者と捉えたなら，著書に現れた文言や人生の一部によって，彼の全人生を解釈するに等しい過誤を犯すに等しかろう。個々の有名無名の人々が後世から見た既定の着地点に向ってその生をおくっているかのような解釈は虚像と言えよう。

本稿では伊藤の著書の内容には踏み込めなかった。今後の課題である。また，ロシア語教育史，日本語教育史からのアプローチも必要であろう。

参考文献

石川遼子（2005）「国分象太郎」舘野晳『36人の日本人』明石書店

植田晃次（2012）「明治期朝鮮語学習書・伊藤伊吉『独学韓語大成 全』の書誌学的研究」李东哲・

62） 松島（1912:10）。

63） 植田（2012:210）。

权于 主编『日本语言文化研究 第二辑 下』延边大学出版社
江差町史編纂室（1983）『江差町史　第六巻　通説二』江差町
乙部町史編さん［ママ］審議会（2001）『乙部町史　下巻』乙部町
梶井陟（1979）「植民地統治下の日本人の朝鮮語学習書」旗田巍先生古稀記念会編『朝鮮歴史論集（下巻）』龍溪書舎
倉橋正直（1989;2000新装版）『北のからゆきさん』共栄書房
京城新報社 編纂（1909）『朝鮮紳士録』京城新報社
櫻井義之（1979）『朝鮮研究文献誌－明治・大正編－』龍溪書舎
仁川府（1933）『仁川府史』仁川府
SUN YUNA（2009）「近代日本語資料としての朝鮮語会話書－明治期朝鮮語会話書の特徴とその日本語」東京大学博士学位取得論文
高尾新右衛門（1916）『元山発展史』高尾新右衛門
趙堈熙（2010）「『独学韓語大成』におけるハングルのカタカナ音注表記について」『日本語教育』54，韓国日本語教育学会
朝鮮公論社 編纂（1917）『在朝鮮内地人紳士名鑑』朝鮮公論社
原平三（1940）「我が国最初の露国留学生に就いて」『歴史学研究』10（6），歴史学研究会
針谷為治（1928）『創立満五十年記念写真帖』柏樹尋常高等小学校開校五十年記念祝賀協賛会
放天生（1940）「是れぞ隠れた憂国の志士－南鮮に伊藤伊吉翁と語る」『南進』5（6），南進社（台湾・中央研究院「日治時期台湾研究古籍資料庫」DB，副題ママ）
町田義介（1942）『元山商工会議所六十年史』元山商工会議所
松島廉作（1912）「日語教範序」伊藤伊吉『独学日語教範 全』中里こま（発行者）
宮津市史編さん［ママ］委員会（2001）『宮津市史 史料編 第四巻』宮津市役所
宮津市史編さん［ママ］委員会（2004）『宮津市史 通史編 下巻』宮津市役所
無署名（1893）「日露韓貿易株式会社」『大阪商況月報』9（1893.10.30）佐藤為三郎
山岸光宣（1940）『幕末洋学者欧文集解説』弘文荘
吉岡英幸（2000）「明治期の日本語教材」『日本語教育史論考』凡人社（発売）
孫禎睦（1980）‘開港期 日本人의 內地浸透・內地行商과 不法定着의 過程’“韓國學報”21，一志社
허재영（2011）‘일본인을 대상으로 한 조선어 교육 자료’허재영 해제（2011）
허재영 해제（2011）“독학한어대성（獨學韓語大成）（일본인을 대상으로 한 조선어 교육 자료 1）”도서출판 역락

＜伊藤伊吉年譜＞ 日付欄のＭ・Ｔ・Ｓは明治・大正・昭和の略

日付	年齢	伊藤の出来事	社会の出来事
1832/ 天保 3.6		母・タツ（辰子）誕生	
1863/ 文久 3.1.13	0	伊吉誕生（1860（万延元）年生まれ説もあり）	
1864/ 文久 4・元治 1 または 1865/ 元治 2・慶応 1	2	父，病死し，母と「茅屋竹扉、僅かに膝を容れ、浣衣補裳、纔かに口を糊す」生活を送る	
1880/M13	17	浜松中学校卒業。北海道に渡り，江差港柏樹学校教授・乙部学校長・巡廻訓導となる	元山開港（5 月）
1882/M15	19	暇を得てシベリア・北部朝鮮を踏査し帰還	
1883/M16.2	20	夫人・喜美子誕生（年に誤りの可能性あり）	
1884/M17 以降？		辞職しウラジオストックに渡り，「露商の番頭」となり行商を営む	
?		朝鮮半島北部の「生牛」販売を数年，風土病のため業務遂行不能になる	
?		静岡に戻り，私塾を開く	
?		二俣に移る	
?		奈良に遊ぶ	
1891/M24?	28	露国皇太子来遊の際，接伴委員となる	
1891/M24	28	『独学日露対話捷径』を編纂	大津事件（5.11）
大津事件後		ロシア軍と海南島へ，港湾・水路等を調査	
1892/M25	29	東京に出る。政財界人と知遇を得る。対韓策を建て同人間を周旋する	
1892/M25.8.27	29	『独学日露対話捷径』初版	
1893/M26	30	日露韓貿易会社の組織に伴い，三丹州で株式募集	宮津港，特別輸出（入）港に指定（3.14）
1893/M26.6.16	30	日露韓貿易会社創立，総支配人となる	
1894/M27	31	ロシアへ商況視察	日清戦争開戦（8.1）
1895/M28	32	朝鮮へ商況視察，元山で雑貨店を開き大豆の買収を始める	日清戦争終結（4.17），閔妃殺害事件（10.8）
?		日露韓貿易会社総支配人として，元山に本拠を置き沿岸貿易に従事し奇利を博す。この間，元山民会議長，元山商業会議所長	
1896/M29.5.17	33	雞林奨業団を結団	
1896/M29.11	33	長女・富美子誕生	
1898/M31	35	元山商業会議所議員，元山居留地会議長	
1901/M34	38	商業が不振になる。迎日湾から米穀を積み豆満江に赴くも，暴風により損失を受け，「北韓貿易」から撤退する	防穀令実施（8.25）
1902/M35.1	39	長男・敏誕生	
1903/M36.8	40	次男・一也誕生	
1904/M37	41		日露戦争開戦（2.10）
?		東京に戻る	
?		浜松に戻り，『独学韓語大成 全』となる原稿を執筆するも書賈に顧みられず筐底に	

1905/M38.8.28	42	『独学韓語大成 全』初版	日露戦争終結（9.5），第2次日韓協約（11.17）
1906/M39.3.8	43	『独学日露対話捷径』訂正増補再版	
1907/M40.7	44	日露韓貿易会社解散	
1907/M40.10.25	44	『独学韓語大成 全』再版	
1908/M41.9.20	45	『独学韓語大成 全』3 版	
1908/M41	45	東洋拓殖会社創織・入社，参事となり京城に	
?		東洋拓殖会社を辞職し，静岡に戻る	
?		屏居数月，『独学日語教範 全』の原稿執筆	
1908/M41.6	45	次女・玉江誕生	
1909/M42.4.20	46	『独学韓語大成 全』4 版	
1910/M43.3.6	47	『訂正増補独学韓語大成 全』訂正増補 5 版	
1910/M43.7.15	47	『訂正増補独学韓語大成 全』訂正増補 6 版	韓国併合（8.22）
1911/M44.10.7/10	48	『訂正増補独学韓語大成 全』訂正増補 7 版	
1912/M45.3.28	49	『独学日語教範 全』	
1912/M45･T1	49	母は 81 歳で健在	
1912/T1.11	49	朝鮮に渡り，（株）朝鮮奨産所を興こし所長に	
1913/T2.2	50	三女・朝香誕生	
1917/T6 現在	54	朝鮮奨産所所長現職	
1917/T6 頃？	54	日本語通信教授国語界主幹	
1940/S15	77	在釜山・海雲台	

本論文は科学研究費補助金（課題番号20320081および23520671）による成果の一部である。科研研究会では矢野謙一教授（熊本学園大学）から多くの助言を得た。また，関係各図書館のご配慮と匿名査読者2名からの貴重な助言も得た。感謝いたします。